平戸菊花飾細工技術

〈平戸洸祥団右ヱ門窯〉中里太陽さん

見事な手業で伝統の花を咲かせる

小さな土の塊から花びらの形に一枚ずつ切り出していく。そうして最後に優しく花びらを押さえると、ふんわりと一輪の菊の花が咲いた。土の塊でありながら、それはまさに「咲いた」としか言いようのない瞬間であった。

美しい菊の花を咲かせたのは、平戸洸祥団右ヱ門窯の十八代目・中里太陽さんだ。中里さんが平戸菊花飾細工技術を父から教わったのは、二十三歳の時。しかし当時、平戸菊花飾細工技術はあくまでも窯に受け継がれた多くの技術の中の一つに過ぎなかった。

転機が訪れたのは二〇一四年。「ドイツなどヨーロッパの国際見本市に出展した際、自分たちの技術を代表するようなものがないと、海外では通用しないことが分かりました。その頃、父が菊花飾細工技術の保持者として佐世保市の無形文化財に指定され、これなら世界で勝負できると確信しました」。

中里さんは長い年月をかけて数えきれないほどの菊の花を作り、腕を磨いてきた。「無垢の土の塊から菊の花を作る、そのこと自体が楽しい」と話しながら、その手はリズミカルに動く。土が乾かないうちに菊の花を完成させなければならないため、丁寧さとスピードの両方が大事なのだという。先端の尖った竹の道具で一枚ずつ花びらを切り出していくその見事な手業に思わず息をするのを忘れてしまった。

「私がこの菊の花を作れるのは、先祖たちが技術を守ってきてくれたおかげです。最近、私は自分が四百年の歴史の一部なのだと考えるようになりました。現在、平戸菊花飾細工技術は世界で高い評価を得ていますが、二十年後は分からない。でも窯を守ってさえいれば、また次の世代ががんばってくれるはず。そう信じて、あまり時勢に左右されないようにしています。三川内焼の歴史は一人では作れませんから」。

中里さんの言葉には、脈々と受け継がれてきたものを背負っている人だけが感じることのできる世界がある。

工房では、家族四人が並んで手を動かしている。ものづくりに向かう緊張感と家族ならではの温もり。三川内焼の技術はこうして静かに継承されてきたのだろう。

1枚ずつ花びらの形に切り出していく様子。繊細な手業に魅了される。

中里太陽さんは「私たちのものづくりは、お客様の期待を超えていかなければなりません」と話す。